

# 日蓮宗徒として公害問題にどう対処していくべきか

——第五回中央教化研究会議分散会報告——

渡 辺 清 明

第二テーマ「日蓮宗徒として公害にどう対処していくべきか」については、(一)全国各地における公害の現状はどのようなか、特に本宗の寺院教会結社並びに檀信徒の被害状況公害への意識はどのようなか。(二)日蓮聖人の教えから公害をどうみるべきか。(三)公害問題に対する具体的行動はどうあるべきか。(四)公害問題を教化活動の中にどう生かしていくべきか。の四項目が問題として提出された。まず四日市の公害問題に長年取り組んでこられた伊藤如願師から発題があり、一、実態を出し合って考えよう。二、何んらかの行動を起そう。三、檀信徒の教化の中にどう生かすか。以上三つに重点をしぼって実りある討議をしてほしいとの提案を受け、三分散会にわかれて討議に入った。第一の項目の「全国各地における公害の現状」については、出席者から次々に報告がなされた。

まず八幡製鉄所をかかえる北九州八幡地区では公害が問

題視される以前、ずっと昔から大気汚染、水質汚染があり公害のはしりともいふべき状況があったこと、しかし製鉄所の盛衰が直接住民の生活に大きな影響を与えてきたこともあって住民にあまり公害意識はなく今ではむしろ企業主のほうに公害といわれることに気がつかっている現状であること。また新しく建設中の化学工場の影響が将来心配であること。それに筑豊の炭鉱地帯の慢性的な地盤沈下の姿などが詳細に報告された。

次いで神戸、大阪、尼崎にまたがるひどい悪臭を始めとする近畿大都市工業地帯の大気汚染。新幹線や自動車、特に大阪空港の滑走路附近では赤ん坊が鼻血を出すなどの異常を訴えるにいたった騒音問題。岡山からはカネミ油、ヒ素ミルク、水島新産都市の光化学スモッグ、ゼンソク、瀬戸内海の汚染による漁獲量の激減と奇型魚の出現など県南一帯をみると公害の種類でないものはないといった現状が、

述べられた。

その他東京、大阪等大都市の公害、四日市を始めとする大化学コンビナートによる複合公害、富山のイタイイタイ病、静岡県富士市周辺の大気汚染とヘドロ。あるいは人体実験問題を引き起した薬害問題と、それへの取組みの経験などが発表され、農薬や鉍毒、工場排水などによる汚染米や、汚染牛乳、加えて添加物による有害食品の蔓延。その他、所かまわず捨てられるゴミやアキカン。不必要に山奥深くわけ入ってくる道路開発などによってひき起されている環境破壊のすさまじさや現在進行中の地域開発に対する不安などが述べられ日本列島全域に広がる被害の実態が明らかにされた。

このような公害によって人類が生活と生存をおびやかされている現状、特に四日市では公害病認定患者は八八七名に及び潜在患者も加えると何千人という数になること、しかもそのうち約二十名の認定患者は本宗の檀信徒であるなど直接、間接に本宗の寺院並びに檀信徒が被害をうけており、教師として取り組みを進めてゆくことの必要性を確認し合った。と同時に、討議資料として提出された公害に対する意識調査の結果から見ても強い関心を示す教師のある反面、なお無関心層の多いこと。公害は宗教者の問題にあらざりとして取り上げようとしないう教師もあることなどが指摘され、より多くの教師に公害問題を理解してもらうため

に、この討議内容を全国の寺院に配布してもらいたい、そして出席出来なかった教師からも被害状況を報告してもらいまとめたものを再度配布してほしい、被害実態を含めて公害問題に関する詳細な調査を教団として行ってほしい、などの要望も出された。

第二の項目である「日蓮聖人の教えから公害をどう見るべきか」については、現宗研提出の討議資料「日蓮聖人の教えと公害の問題」(茂田井教亨師)が①この世の災難といわれるものも実は人類が正を離れて邪についていることから起ってきているのであって人為的なものであること。

国土と人間とは一体であり、私達の信仰は、心の救いと国土の救済の不可分の両面から成り立っていないければならぬこと、という立正安国論の姿勢から公害をみること。②同一の苦の論理は、公害問題が人類共通の苦であり、問題であることを教えていること。③宗祖の善悪の概念を把握して、生命の重みと経済利益第一というしくみ、価値観とを比較する論理で公害を考えること。④道理を基準とする宗祖の歴史観に立って社会を見ること。

以上宗祖の教えのうち四点を中心として公害問題をみるべきであることを提起しており、これと、仏教の根本戒である「殺すな、殺させるな、殺すことを許すな」の不殺生戒が私達の根本になければならないと主張した発題者の提起をめぐって話し合いが進んだ。その結果公害は災難ではな

く人間の起していることであるから人間の手で止めるべきであり、止められる筈である。

また私達も常に被害者であるばかりではなく、知らず知らずのうち、ときにはやむをえず加害者の立場に立たされていることもあることを反省せねばならない。その上で本仏釈尊の愛に生きて社会の具体的な現実の中にとびこんで第二の日蓮となつて動いてゆくことが必要であると積極的な意見が出された。また前述の資料「日蓮聖人の教えと公害」は是非全国に配布すべきだとの要望も出された。

次に第三の項目の「公害問題に対する具体的行動はどうあるべきか」と、第四の項目である「公害問題を教化活動の中にどう生かしていくべきか」については順序を入れかえて、「教化活動の中にどう生すか」が先に話し合われた。

ここでは「近代以来、欲望の自由な解放によって人間は幸福になれる。物質が豊かで、しかも個人個人が自由勝手にふるまうことが許されるような状態が人間の幸福である」というような価値観が支配してきた。その結果があたりかまわず害毒をまきちらしひたすら自己の欲望・利益を追求するような人間を生み出してきたのである。このような人間を生み出した現代文明を批判すべきである」との意見が出され、これに対して「公害の起っているような社会は宗祖の教えに反するものであり、公害を傍観するものは教え

にそむくものであることを教えてゆくこと。公害をとらえることによって宗祖の教えを特徴的に示してゆくことが必要である。」との主張が出された。公害に苦しむ社会は近代以来の欲望を前提とした思想、価値観が作り出したものであるから、これを宗祖の教えから批判していかなければならない。批判してゆく過程で宗祖の教えが人々の前に明らかにされてゆく、との見解が述べられたわけである。

また「我執にとらわれている者のみにくい姿を示し、地獄に落ちこんでゆく未来の姿を教えてゆくべきである」などの意見も出され、公害が人類の破滅、地球の危機をもたらす時期にきているということを私達自身が認識し、人類がここから救われるために仏性の自覚に基づくモラルを檀信徒だけに限らず広く国民に普及して公害を生み出さない人間を育成してゆくことである。統一信行の中でも公害問題をとり上げ、人間尊重を強く打ち出して宗祖の教えを伝えることが大切であり、そうでなければ統一信行の本当の意味も明らかにならないのではないか、との疑問も出された。

これに対して「問題の重要さはわかるが、具体的にどういう態度でどういう方法をとっていったらよいかかわからない」との意見もあり、(三)の「公害問題に対する具体的行動はどうあるべきか」の問題に進んだ。具体的にどうするかについて、まず「公害に関する情報を収集し整理分析

して問題点をはっきりさせる作業を行うべきである。そこから方策も出てくる」との提言が出され、「そのような基礎的作業にもとづく長期的展望を持てるよう教団としても努力してほしい」との要望も出された。そして回向文の中に取り上げてゆくことから出発して、教団としては日蓮宗新聞でキャンペーンを行ったり、ポスター、教箋、映画などを作成して全般的に啓蒙活動と布教活動の上に公害問題を取り上げ、宗内の世論を喚起してゆくべきである、との提案もあり、これに対しては、「宗門人に対して四日市公害の実情を始めて報告し協力を要請したのは十三年前であった。このときに日蓮宗が公害問題を取り上げて広く訴えてくれていたら四日市公害問題はもつとちがった局面を迎えていたであろう。今さらながらくやまれてならない」との発題者の言葉を宗門人は深い反省をもってかみしめねばならない、との訴えも出された。

次にややもすると精神的にも経済的にも孤立して生きがいや失いがちな公害被害者に対して暖かい手を差し伸べたい者と共に広く人々に訴えていこう。また公害のような社会的問題に対しては教団独自の行動も大事であるが、その地域の住民運動の中に加わってやってゆくことが大事である。仏教の価値観の普及という立場に立って住民運動の先頭に立ってゆくよう努力しよう。さらに現代教学の形成と啓蒙活動と住民運動とのつながりの上に立って企業体、地

方自治体に対する諫曉を行ってゆくべきである。など具体的な活動の方法をめぐってそれぞれの経験をもとに多くの重要な意見が出された。

公害問題は宗教者がまっさきに取り上げるべき問題である、と強い関心をもつ教師がいる反面、一般市民の取り組みと比べてみると教団人の反応ははなはだにぶいと言わざるを得ない。そこには寺院住職として行動を起しにくいさまざまな問題が横たわっていることも事実であるが一つには日蓮宗徒としてはどう見るか、どのような方法をとるのがふさわしいか、といった点でわからなくなる、とまどいを感ずるといった事が推測される。その意味で今回のこの討議は意義深いものがある。さらに、公害問題を軸として宗祖の教えが現代に生き生きとしてよみ返り、宗教的な深みから人間性が復活し、公害がすみやかになくなっていくことを念じたい。